

世界のくらしと文化

— モンゴル①

モンゴル国の社会変化と 遊牧民

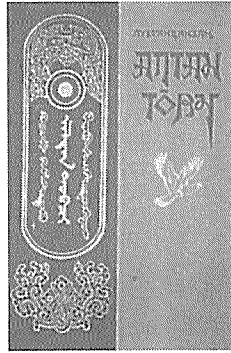


写真1 モンゴル文字(左)とキリル文字の飾り文字(右)で題名が書かれた書物「アルタン・トブチ」

風戸 真理

はじめに

ユーラシア大陸の草原部には、ウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ラクダなどを家畜として飼育し、その畜産物である肉、乳、毛、皮、畜力に依存して生活する遊牧民たちがいる。農耕に頼らずに、肉や乳製品を主に食べて住居ごと移動しながら生活する遊牧のくらしがどのようなりたっているのか知りたかった。私はその一例としてモンゴルを選び、一九九四年からモンゴル遊牧民のもとに通い、牧畜という生業の生活技術とモンゴル国の社会変化について文化人類学の視点から研究してきた。この連載では、モンゴル国の遊牧民に焦点を当て、そのくらしを紹介したい。第一回の本稿では、モンゴル国の社会変化と遊牧という営みのあらましを記していく。

モンゴル国・モンゴル人

「モンゴル国」は、ロシア連邦と中国にはさまれた、日本の四倍の面積をもつ独立国である。広大な国土に対して、人口は約二七八万人(二〇一〇年現在)。モンゴル国家統計委員会と少ない。そして人口の四一%にあたる

約一五万人が首都ウランバートル市に住んでいる(同右)。ウランバートルは高層ビルが林立する大きな都市で、その中には高層アパートの並ぶ地域があれば、ゲル(移動式住居)の密集する地域もある。

先の統計にはモンゴル国の人口の九五%がモンゴル人と書いてある。では、モンゴル人とは誰だろう。実はモンゴル系の民族はモンゴル国の他に、ロシアや中国にたくさん暮らしている。ロシア連邦共和国を構成する共和国群のうち、ブリヤート共和国とカルムイク(ハリムク・タングチ)共和国はモンゴル系民族の国である。中国でモンゴル人がくらす一番大きい行政単位が内モンゴル自治区である。それに加えて新疆ウイグル自治区などにはモンゴル人の自治県などがある。彼らはロシアや中国のなかで少数民族として暮らすモンゴル人である。モンゴル人を名乗る人びとに「モンゴル人とは誰ですか」と問うと、「モンゴル語を話す人だ」という答えが返ってくる。さらにいえば、私が新疆ウイグル自治区のモンゴル地域を訪ねた時、「あなたは『蒙系日本人』ですか」とたずねられた。私がモンゴル語を話すので、彼らは私をモンゴル人とみなし、それでも国籍が日本なので、なんらかの事情で日本で生活しているモンゴル人なのだろうと推測したわけである。このようにモンゴル人

は多国籍民族なのであるが、この連載ではモンゴル国のモンゴル人に限定して話を進める。

モンゴル語

ではモンゴル語とはどんな言葉なのだろうか。モンゴル語は日本語と同じアルタイ系の言語グループに含まれ、語順が原則として日本語と同じである。たとえば「私は昨日学校に行った」はモンゴル語で「ビー(私は)ウチグドウル(昨日)ソルゴリ(学校)ト(に)ヤブ(行)スン(った)」という。英語や中国語のように動詞と目的語の順序がひっくり返ることはないし、前置詞もない。時制を表す接尾辞などは日本語と同じように動詞の後ろにつける。挨拶は、「サイノー(よいか)？」とたずね、たずねられたら「サイン(よい)」と答える。モンゴル語を表記する文字の体系には二種類ある。「モンゴル文字」と「キリル文字」である(写真)。モンゴル文字は縦書き専用の文字なのであるが、日本語と反対に左から右に書いていく。文字の数は全部で八八である。キリル文字は横書き専用の文字で、左から右に書く。文字は二六字ある。モンゴル文字はキリル文字と比べて文字の数が多いうえに、日本語でたとえれば「ちょ

うちょう」を「てふてふ」と書くような古語的な表記をするので、学習するのが難しい。また、日本語で漢字とかなとを混ぜて書くようには、モンゴル文字とキリル文字を混ぜて使うことはできない。

モンゴルでは一九二〇年代までモンゴル文字でモンゴル語を書いていた。当時は文字を読み書きできる人はごく一部の知識人に限られていた。一九二一年、モンゴルはソビエト・ロシアに助けられながら清(中国)から独立した。そのため一九四〇年代から、ロシア語を表記するのに使うのと同じキリル文字でモンゴル語を表記することになった。その後、キリル文字を使った識字教育の実施により、モンゴルの識字率は九〇%を超えた。とはいえ、どんな文字で書いてもモンゴル語はモンゴル語である。日本語を、かなと漢字で書いても、ローマ字で書いても日本語であるのと同じである。なお、中国の内モンゴル自治区などでは今日まで一貫してモンゴル文字で読み書きをしている。

モンゴル人民共和国からモンゴル国へ

モンゴルは一九二〇年代から七〇年間、社会主義建設の道歩んできた。しかし、ソ連の崩壊をうけて一九九

〇年代に体制を転換した。すなわち、社会主義路線をやめて、民主化と市場経済化に向かって進み出したのである。国名も「モンゴル人民共和国」から「モンゴル国」に変わって今に至る。民主化後の二〇年間で、モンゴル社会はめまぐるしい変化をとげた。西側諸国に対して国が開かれ、日本人が自由に旅行できるようになった。街には物と自動車があふれるようになった。民族文化の復興の一環として、学校ではモンゴル文字の授業も始まった。そのような社会変化のもとでも、草原では一貫して、家畜を育ててその畜産物を利用する遊牧のくらしが営まれてきた。

遊牧民の仕事と生活

それでは草原の遊牧民の仕事と生活をみてみよう。ウランバートルなどの都市部を除いた地域では、大部分の人びとがなんらかの形で家畜と関わっている。草原に住んで自ら家畜の世話をする遊牧民のほか、地方の町に住んでいても家畜を所有し、草原の遊牧民に家畜を預けている人が多いのである。

遊牧民にとっての毎日の仕事は「放牧」である。家畜を草原に連れ出し、約一〇時間ゆっくりと歩かせながら

草を食べさせる。家畜とひとことであっても、ヒツジとヤギは合わせてひとつの群れにできるが、ウシ、ウマ、ラクダは歩く速さも食べる草も違うので、別々に管理する。また家畜の乳を搾るため、放牧中に仔畜が母畜の乳を飲まないよう仔畜を成畜から離して別の群れにしておく。このため、家畜の放牧をする人である「牧夫」はウマに乗って、いくつもの群れを一人で同時に見張ることになる。具体的にいえば、オオカミや家畜泥棒から守りつつ、よい草を十分に食べさせ、水を飲ませ、そして一頭も迷子を出さないように連れて回るのがだ。一匹のイヌの散歩を考えてみてほしい。リードをつけていてもイヌはあちこち歩き回るので目が離せない。放牧というのは、これを数百頭の違う種類の家畜に紐もつげずにおこなうのである。牧夫は家畜に対して、叫ぶ、両腕を大きく広げておどかす、固く乾いた家畜の糞を投げつける、といった熟練の技を駆使して群れをコントロールする。このような放牧は一年をとおして毎日休まずおこなわれる。このように、家を基点として草原で一日家畜に採食させて夕方に再び家に戻る放牧を「日帰り放牧」という。

モンゴルには春夏秋冬の四つの季節があるが、降水量が少なく乾燥していて、九月一日頃には初雪をみるなど、屠殺した家畜の皮は敷物や網の材料にする。肉を食べ終わったヒツジのくるぶしの骨は子どものおもちゃになる。このようにモンゴル遊牧民は家畜から得られる畜産物をあますところなく利用する。

民族服「デール」

次に草原の遊牧民が毎日着ているモンゴルの民族服「デール」について述べたい（写真左）。デールの形は、基本的に性別や年齢の区別なくほぼ同じである。素材は絹（とよぶが実際は化繊）や綿である。種類は、夏用のひとえのデール、春秋用のあわせのデール、冬用の綿入



モンゴルの民族服「デール」を着た若夫婦

寒い時期が長い。家畜は春、出産すると乳を出す。その乳は家畜の赤ちゃんのためのものだが、人間が半分もらう。これが搾乳である。ウシ一頭からは約一・八リットルの乳が朝晩二回得られる。しかし、草原には冷蔵庫がない。乳は夏には腐敗しやすいため、ヨーグルトにして当面の保存をし、これを脱水して長期保存に耐えるチーズを作る。というのも冬には家畜の泌乳量が減り、得られる乳もわずかになるからである。男性は主に日帰り放牧に従事し、女性は毎日、乳製品の加工に精を出す。何回も出産して老いた家畜は屠殺する。そしてその肉を食べる。肉の保存は、枝肉を平らに広げて風通しのよいゲルの壁につるしたり、ジャッキーのように細く切つて干したりするが、夏にはどうしても腐敗が進んでしまう。だから屠殺は、気温が零下になって肉が自然冷凍される秋口に一年分をまとめてする。

家畜から得られる畜産物は、彼らの衣食住のすべてに役立つ。衣類としては、育たずに死んでしまった仔ヒツジの毛皮を民族服の裏張りにして厳冬期の防寒着にする。生きているヒツジからも毎年毛を刈り、これでフェルトのマットや長靴を作る。フェルトは住居にも利用する。彼らの住む移動式の住居「ゲル」は、約二〇〜四〇枚の大判フェルトで床、壁、天井が覆われている。ま

れデールと毛皮の裏張りがついたデールがある。使い方としては、毎年旧暦の正月に新しいデールを作ってもらっておろし、最初は晴れ着として着て、汚れてきたらやがて作業着や防寒着にする。生地の色は、青が一番人気である。とくに若い男女に好まれる。次に茶色である。男子には赤紫や灰色も人気である。ピンクは老人の色とされていて、黄色と赤は僧侶のデールの色と決まっている。

デールには日本の着物と同じように「ふところ」があり、男性用のデールの着付け方はふところをたつぷり取るところが特徴で、女性の着付けではほっそりと着付ける。ふところにはたくさんの方が入る。遊牧民は出かける時にカバンを持たないで、ふところに収める。小さな物はブーツの縁に押し込む。ふところの収納力は抜群で、日本のある小学校でデールの着付け体験をした時には、男子生徒のふところに同級生一五人分の筆箱が入ったほどである。

デールの下には、若者であればTシャツにジーンズなどの「洋服」（これをモンゴル語で「ロシア服」という）を着る。ふだんは「ロシア服」でおしゃれを楽しむ若者たちも、家畜の世話などの汚れる作業の時にはその上にデールを羽織る。デールは暖かく、動きやすく、中に着て

いる服を汚れから守り、家畜に攻撃された時などには緩衝材の役割を果たす。ゲルは晴れ着にもなれば、作業着としての高い機能性をも兼ね備えた草原の必需品なのである。

遊動生活

モンゴルの遊牧民は年に四回から一〇回程度、ゲルごと引っ越しをする。ゲルは携行に便利なつくりになっていて、約二時間で解体できる。そして、牛車一〇台もしくはラクダ一〇頭の背に乗せて数十キロ移動し、新しいキャンプ地でまた組み立てるということを一日のうちになすことができるのだ。移動のタイミングは家畜がおしえてくれるという。日帰り放牧中、家畜たちがいつもの場所でゆつくりと採食せず、どこかへ行こうとしてじっとしなくなる時期がくるといふ。それが草がなくなつた合図であり、移動の時期なのである。人間は、家畜が向かおうとする方へ、家畜を追いかけるようにして引っ越しする。

これまでに使ってきた「遊牧」という言葉の意味は、「遊動」しながら「牧畜」を営むこと、である。一日のなかで移動しながら家畜に採食させることを「日帰り放

牧」というのに対して、一年間のタイムスパンで移動しながら家畜をよい草場で採食させることを「遊動」といふ。遊動というのは英語の nomad の訳で、ある一定の範囲内をぐるりと回るように移動することである。よつて遊牧民とは、遊動生活しながら牧畜を営む人びとなのである。

遊牧民がこれまで維持してきた社会にもこの二〇年間のあいだに変化が起きた。私が最初にモンゴルに行った頃には、日没後にはろうそくを灯して家事をして早寝していた。今はほとんどの家でソーラーパネルの充電器に照明器具・テレビ・携帯電話などをつなげて、日没後の時間を楽しく過ごしている。彼らは家畜を売ったり、とくにヤギから取れるカシミア毛の収入を貯めたりして家財を増やしてきた。町や首都にアパートを買った遊牧民も多い。引っ越しも自動車でおこなわれるようになった。

以上、モンゴル遊牧民をとりまく社会の様子とその変化と、そのなかでも変わらない牧畜の基本的な生活技術について書いてきた。今後は、食べ物や子どもに焦点を当ててモンゴル遊牧民のくらしについて詳しく紹介していきたい。

(かざと まり／神戸山手大学非常勤講師)